

# 日本点字事情 かわら版

2008年2月13日発行 NO.75

横浜市立  
盲特別支援学校  
点字研究部  
文責 道村静江

## 付属盲の研修会、新たな情報がいっぱい

1月26日(土)に筑波大学付属視覚特別支援学校で開かれた「試験問題の点訳」研修会に本校の先生方数人と参加してきました。そこで感じた大きなこと。

『試験問題の点字表記 第2版』が発行されたので、ほぼそれに従った点訳がなされているのかなと思っていたのですが、とんでもない。付属盲(略称)は、数多くの大学入試点訳に関わっています。入試点訳事業部に参加している先生も多くいらっしゃいます。その中で培われてきたノウハウが数多くあり、実際に難しい大量の入試点訳をしてきたからこそその貴重な話をいっぱい聞くことができました。その中心の柱が「生徒が早く正確に意味がとれること」でした。そのためには、ある一つのパターンだけを使っていたのでは対処できないことも数多くあります。いわゆる臨機応変さが求められるのです。その意味で、『第2版』は基本は書かれているけど、多くのパターンを示してくれてはいません。その冒頭に「本書に記載されている事項は原則的なものであって、本書に記載されていない表記の仕方や配慮は一切認めないというものではない。」「本書に記載されている点訳例はあくまで例示であって、工夫の余地のないものではない。」と記されています。

そう言われても、日頃正式な入試点訳の経験のない全国の先生方は、他にどのような方法があるのか、どんな工夫をするとよいのかはわからないと思うのです。だから、この『第2版』を穴のあくくらい読み込んで忠実に守るしかないのが現状だと思います。

私は、日本点字委員会の委員として、『第2版』の作成に少しだけ参加しましたが、自分の知識も不足で、具体的な様々な方策を経験していないので、何程の意見も言えませんでした。発行されて実際によく読み込んでやっと全体像が見えてきたという情けなさです。そんな言い訳ばかりしてもだめですね。

ですから、それを基に「かわら版71号～74号」に『第2版』の解説を載せましたが、今回の付属盲の研修会で、それにとらわれない様々な方法があるのを知り、それもお知らせしなければならないと思いました。そうは言ってもすっきりまとめきれません。今回は新たに知った大きなことだけ載せませんが、もう一度整理して、『点訳便利帳 2008年版』に載せたいと思います。

## 試験問題の点字表記 その5

### 1. 問題冊子の作成

- (1) 用紙の節約を考えるよりも、読みやすさを優先させる。
- (2) 片面書きを基本とする。

机上に問題を広げるスペースや定位置で読み進めることなどを考慮すると、

片面書きで作成するのがよい。しかし、英語などで両面を見開きにして対訳させて読ませたい場合など、両面書きがよい場合もある。

(3) 図や表などは、別紙で作成したものを本文の該当箇所に差し込むのを基本とするが、それが無理な場合には、別紙で提示してもよい。

(4) 問題はホッチキスで留めるよりも、ひも綴じがよい。その場合、平らに開くようにするため、あるいは読み終わった頁を裏に回したりできるように、余裕を持たせた結び方にする。

(5) 点字プリンター用紙の右側の耳の部分は、試験中の目印として活用できるので、切り落とさずに提示するとよい。試験中は必要以外の小道具は持ち込めないで、この耳の部分を有効に利用する方法を日頃から工夫しておくことよい。その利用法としては、ミシン目を切り落とすか残すかで区別を付けたり、穴を利用して区別したり、点筆を差し込んで位置を特定するなど、様々に活用できる。

## 2. 解答の書き方と留意事項 (75号と重複部分があります)

(1) 解答の作成に当たっては、客観的な採点に堪えられるようにするため、あいまいな書き方をしないことが大切である。また、解答のレイアウトは様々な書き方が考えられるが、本人による見直しを容易にするためや採点者に正確に伝わるようにするための工夫が必要である。

(2) 受験番号と受験者氏名、あるいは教科名や学年・氏名など指示された項目とページ数を忘れずに書く。解答用紙が複数枚になる場合は、それらをすべての解答用紙に書く。

(3) 解答用紙は、片面書きを基本とする。裏面書きをして行が重なってしまったり、採点されるときに見落とされたり、見にくかったりするのを避けるためである。

(4) 解答は、通常行頭を2マスあけて3マス目から書くが、大問番号と小問番号の書き出し位置は変える。大問番号は通常4マスあけにして書き、行替えしてから小問の答えを2マスあけて、1行1答を原則として書き並べていく。小問の中の同じレベルの答えの書き出し位置にこだわる必要はない。

算数などでは、式と答えは行を替えて書く。式の最後に出た数字に単位を付けて答えとしないようにする。

(5) 大問番号・小問番号・選択肢などに用いる番号・記号は、問題文に用いられている通りに使用する。

(6) 解答を選択肢の番号・記号で答える設問では、設問番号の後を1マスあけて解答を書く。設問番号に裸数字が用いられている場合には、2マスあけて解答を書く。

(7) 原則として、同一行に二つの解答は書かないが、複数の解答が求められている設問で、番号・記号等の短い語で解答できる場合は、この限りではない。

例えば、複数の選択肢解答が求められているような設問の解答の仕方には、同じ行に答えを並べてもよい。その場合、答えの間を2マスあけか1マスあけにする。また、設問番号と解答の番号・記号をはっきり区別するために、棒線□ :: □ :: □を使用するのも有効である。

(8) 校内などでの簡単な試験では、新たな用紙を使わなくても、後段に「テイセイ」と明記して番号・記号等を付けて新たな解答を書いてもよい。このような場合を想定して、解答用紙の下数行を残しておくのも工夫の一つである。